カントの世界概念

――アンティノミー論を中心として――

岡崎英輔

カントは、彼の初期の「天空論」をはじめとする多くの著作において世界の問題に対しさまざまな考察をおこなっている。「純粋理性批判」の「アンティノミー論」も世界の問題に対しておこなわれた種々の考察のうちの一つである。とはいえ、アンティノミー論におけるカントの根本的意図は、世界そのものを対象とし、そこからみずからの世界概念を展開することにあるのではなく、理性の正当な使用を明らかにするにある。そうしてそれが合理的宇宙論の批判という形でおこなわれるのである。すなわち、アンティノミー論においてカントは、合理的宇宙論の根本前提が含む内的矛盾を定立と反定立の対立すなわちアンティノミーとして際立たせ、両主張を抗争させることによって混乱におとし入れ、かくしてそこから合理的宇宙論が誤まりにもとづく仮象の学なることを指摘し、ひるがえって理性の正当な使用を明示するのである。アンティノミー論とは本来的にはこのように理性の正しい使用を問題とするものなのである。

とはいえ、この理性の正当な使用も、誤った理性使用すなわち合理的宇宙論の世界概念の批判を介してはじめて明らかになるのである。それゆえ批判にテーマを与えている世界概念を問題にすることも、われわれには可能なわけで

ある。そして一般に批判は、批判されるものを超えたものを前提することなしには不可能である。カントが合理的宇宙論の世界概念を批判するとき、そこには合理的宇宙論を超えたカント自身の世界概念が考えられているのでなければならない。このカント自身の世界概念とはいかなるものであろうか。そしてそれは人間の認識に対してどのような寄与をなすものであろうか。われわれはこの問題をアンティノミー論を中心として考察してみたい。

一

世界という概念はさまざまな意味で用いられうるが、アンティノミー論においては主として自然的世界が考えられている。この自然的世界に対する合理的宇宙論からの規定およびカント自身の規定を考察する前に、自然的世界ということでわれわれは一般にどのようなものを考えるのかをみてみよう。自然的世界がいわれるとき、われわれは目に見えるものとしての宇宙を考える。そしてこの宇宙はさらに空間、時間的にまとまりをもつ一箇の統一体として考えられるであろう。このような一箇の統一的全体を世界と考えるのである。それはすべての存在するものをみずからのうちに蔵し、かつ拡がりかつ持続する全体であり、実在するものすべてを超えて包括すると考えられるゆえに、根源的な全体と呼ぶことができよう。もちろんわれわれは、自然的世界をつねにこのようなものとして明確に意識しているわけではない。しかし世界なる概念について反省してみるとき、やはりこのような全体としての世界というものに考えいたるのである。かかる全体としての世界は、われわれが対象的に限定しうるごときものではありえない。逆に、限定され客観化されたものをみずからのうちにつつむ全体こそが世界と考えられるのである。世界をこのように見る見方は、やはり素朴なものであろう。しかしそれだけにきわめて自然的な、さらには根源的なものともいえるの

である。それゆえこのように考えられた世界を全体的に考察し、意味づけることが、古来、形而上学の主題とされてきたのである。たとえばギリシァ哲学においてかかる全体は——観照の対象としてであるが——コスモスと考えられ、宇宙論の主題とされたのであり、また有神論的形而上学の世界表象も、かかる全体を意味づけ限定しようとしたものなのである。カント自身もまた全体としての世界を、彼の初期の宇宙論的著作である「天空論」の中で考察している。

ところで全体としての世界が——観照のではなく——概念的な考察の対象とされ、かくして世界が有限である、無限である等の限定が付される場合、世界が全体であるという規定からみれば、かかる限定は世界に対して妥当すると同時に妥当しないということになるであろう。妥当するというのは、全体としての世界がまさに全体であることによってみずからに付せられた限定をも包括するからであり、妥当しないというのは、限定された世界とはもはや全体としての世界ではなく部分的なものにすぎず、それゆえその限定は何ら世界全体についての規定ではないからである。このことは全体としての世界は概念的には把握しえないことを意味するであろう。カントはそのことを、単なる全体と部分との形式的関係からではなく、人間の認識の観点から明らかにするのである。

カントは全体としての世界が認識不可能であることを明らかにする。とはいえ、全体としての世界とは批判の対象ともなりえない。批判とは元来、分けることを意味する。しかし全体とはまさに分けられえないものであり、したがって全体としての世界は批判をも超えるからである。それゆえカントの批判は、いわば分けられうるものとしての全体、換言すれば、全体としての世界に付せられた或る限定の吟味に向うことになる。その限定とは、合理的宇宙論が世界なるものに対していだいている表象にほかならない。カントは合理的宇宙論の世界表象を批判し、全体としての

世界について究極的な限定を付することの不可能を明らかにするのである。

ところで問題は、このような批判をおこなうさいに合理的宇宙論の世界表象としてカントが考えていたのはどのようなものであったのか、ということである。合理的宇宙論なる学は、一般にヴォルフに由来すると考えられている。それではカントの考えた合理的宇宙論とはヴォルフの宇宙論そのものであり、したがってヴォルフの世界表象が批判されるのであろうか。しかしこれは疑問といわなければならない。なぜならヴォルフにおいては、世界には可視的な世界と可能的な世界とが考えられており、しかもそれぞれの世界は時間・空間の構造を異にすると考えられているのであるが、[1] カントの「批判」においてはこのような二つの世界は考察されていないからである。それゆえこのことからだけでも、カントはヴォルフの世界表象そのものを批判するのではないといえるのである。むしろカントの立ち向う世界表象とは、カント自身の立場から考え直された合理的宇宙論の世界表象なのである。したがってそのさい、物理学者カントの考えが、世界表象の規定にとって大きな意味をもつであろう。この観点からヴォルフの世界表象に対するカントの態度を追ってみよう。ヴォルフはそれぞれ時間・空間構造を異にする可視的世界と可能的世界を考える。ところで物理学者カントによれば、同一の空間・時間構造にあってはすべての世界は合一するが、異なった空間・時間構造にあっては相互に結びつくことはありえないのである。[2] かくしてヴォルフの二つの世界は、カントのとるところではなくなる。カントにおいて可能的世界が考えられるとしても、それは同一の空間時間構造をもつような可能的世界なのである。加えてニュートン学者カントにとっては、ニュートン的な空間・時間が唯一の真なるものである。カントはこの観点から合理的宇宙論の世界表象を考え直すのである。そしてその結果として考えられる世界表象とは、われわれが生きている世界である可視的世界が唯一の世界である、という表象なのである。カントはみずからの

観点から考えられたかかる表象を、合理的宇宙論に帰しているのである。

ところでカントがニュートン的な空間・時間から世界を考えているということは、世界か唯一であるという右の規定とならんで、合理的宇宙論の世界表象に特殊な規定を与えることになる。すなわちそれは、世界が無限な空間・時間において存在しているという規定である。換言すれば、唯一の、そして被造物であるゆえに当然有限的な世界は、空間的には無限に延長する空間におけるいわば島のごときものと考えられ、また時間的には不変的な時間の無限性において有限的に進行するものと考えられることになるのである。有限な世界とは、この場合、それ自身は無限な、あるいは別の規定からすれば空虚な空間・時間の中に存するごとき世界となるのである。(3)

しかしながら、カントによってかかるものとして考えられた合理的宇宙論の世界表象は、それ自身矛盾的なものといわなければならない。ニュートンにおける空間・時間は、神のセンソリウムとして絶対空間であり、絶対時間である。それは絶対的に無限であり、物質と無関係に実在するものである。もしもこの絶対空間・時間にもとづいた世界が考えられるとすれば、その世界は当然空間的にも時間的にも無限となり、したがって有限的世界にも、またその根拠としての神の創造なる表象にも反することにならなければならない。それゆえ、無限な空間・時間における有限な世界という表象は、カント自身このような形で世界の問題を受取ったと考えられるにしても、すでに矛盾的なものといわなければならないのである。それでは有限な世界という表象は矛盾なしには考えられないのであろうか。カント自身、第一のアンティノミーの反定立に対する註の中で、「ライプニッツ学派出身の哲学者たちの見解」に言及し、彼らが世界の限界は空間・時間に関して十分に可能であると考えていることを指摘している（A431＝B459)。ライプニッツ学派出身の哲学者、とくにヴォルフにとって有限な世界を矛盾なく考えることは可能なのである。いな現実

的に世界は有限なのである。けれどもこの場合には当然、絶対空間・時間とは異なる構造をもつ空間・時間が前提されているのでなければならない。それは、世界全体と同時に創造されたものとしての空間・時間なのである。すなわち事物の並存の秩序として成立する空間であり、継起の秩序からなる時間である。このように空間・時間も、世界と同じように有限なものと考えられる場合には、有限な世界は矛盾なく存立するのである。しかしながら、かかる空間・時間はカントの採るところではない。カントにとってはニュートン的な空間・時間こそ唯一の真なるものなのである。それゆえ、ライプニッツ学派の主張する異なった空間・時間にもとづく有限な世界の表象は、カントによって単に指摘されたにとどまり、積極的な考察を受けることもなかったのである。したがって、カントの考える合理的宇宙論の世界とは、依然として無限な空間・時間における有限な世界という矛盾的なものなのである。

このように、カントによって合理的宇宙論の世界表象とされているものにおいても、カント自身の観点からする問題設定が優越していると考えられるのであるが、このような事情はその他の点にも見受けられる。たとえば合理的宇宙論にあっては現在、過去、未来の事物を包括すると考えられている世界の総体なる概念[4]は、カントにおいては単に時間的継起の面から考えられ、前件へさかのぼる背進においてのみ問題とされ、後件へと下降する進行、したがって未来に関する論議は何らなされていないのである。カントによる問題設定の変更は、カントの与えているアンティノミーの定式をみるとき、さらに明らかに示されるだろう。すなわちカントのアンティノミーの定式は、合理的宇宙論において生じたであろう形而上学的主張間の対立をそのまま定式化しているのではないのである。たとえば第一のアンティノミーにおいて定立が神によって創造された有限な世界を主張しているのに対し、反定立はそれに対立する主張、すなわち空間・時間の無限性から考えられる無限な世界、さらには「神すなわち自然」という主張を何ら呈示す

ることなく、単に認識の観点からする定立の否定にとどまっているのである。[4] このようにカントは、定立には形而上学的な積極的主張をおこなわせるが、反定立には認識の観点からする定立の否定という役割だけしか与えていないのである。これは四つの対立のすべてについて言いうることである。

それではこのような世界表象についての規定の変更、あるいは問題設定の変更の理由とは何であろうか。それは明らかに形而上学的存在論的問題を人間認識の面から考察するがためにほかならない。合理的宇宙論の世界表象をニュートン的空間・時間における世界と考えたのも、またアンティノミーの諸定式を形而上学的主張とそれに対する認識の観点からの否定という形で定式化しているのも、そのためにほかならないのである。ただニュートン的空間・時間がカント自身の認識の立場を基礎づけるものであるのか、換言すればニュートン的空間・時間がカント自身の空間・時間なのであるかという疑問は呈出されうるであろう。カントは絶対空間と絶対時間とを二つの不合理物（A433＝B461）として否定し、空間・時間をそれ自身として存在するものではなく、主観における感性の形式であるといっているからである。しかしながら、かかる感性の形式も、自然の現象に適用される場合を考えてみれば、それはニュートン的空間・時間と変らないであろう。カントが感性論において空間を与えられた無限の量と（A24＝B39）規定し、一切を包括する唯一空間（同上）について語るのも、また時間について、それが一次元のみを有し、別々の時間は継時的であるといい、時間のあらゆる限定された長さは、それらの根底に存する唯一な時間を制限することによってのみ可能である（A31f.＝B47）というのも、ニュートン的な無限な空間・時間を根底においているからであると考えられるのである。[5] たしかにカントは神のセンソリウムとしての空間・時間を、いわば人間のセンソリウムとしての感性の形式にかえた。この変更と共に「神すなわち自然」というスピノティスムスにおち入る危険は除かれた。すなわ

ちニュートン的空間・時間の帯びる神学的性質は除かれた。しかしそれの無限性は感性の形式においても依然として保存されていると考えられるのである。それゆえ、ニュートン的空間・時間における有限な世界ということがいわれるとき、すでにその世界が認識の場から考察されるべきことがいわれていると考えられるのである。

ところで、われわれは先にカントのアンティノミーの定式において問題設定が変えられているのをみ、そこからカントの意図が、形而上学的主張に対する認識の観点からの批判にあるという結果を得た。しかしこの点に対しても、アンティノミーの対立はやはり形而上学的主張間の対立なのではないかという疑問は依然として残っているかもしれない。たしかにカント自身、アンティノミーが形而上学的主張間の対立であると考えていることは明らかである。それはカントが問題の対立を「純粋経験論の原理」と「純粋理性の独断論」の対立（A466=B494）として、さらには問題の歴史的前提を示唆して「エピクロス主義」と「プラトン主義」の対立（A471=B499）として考えていることからもいえることである。しかしながらカントの定式を事態的にみるならば、反定立が認識の立場を示しているという先の結果をあらためて確認せざるをえないのである。加えてカントがアンティノミーの生ずる原因として挙げている理由も、われわれの考えを保証するものであるといえるのである。すなわちカントはアンティノミーの原因として、世界の理念においては無制約者についての二様の考え方が成立すること（A417f. =B445）、および理性統一が悟性にとって過大、理性にとって過小という事態が生ずること（A422=B451 Vgl. A486=B514）の二つを挙げているが、そのいずれも理性と悟性の背反、というよりも理性の立場に対する悟性の立場からの否定に帰着するのである。[6] そして悟性の立場とは、とりも直さず認識の立場なのである。反定立は認識の立場なのである。さらにはまた、アンティノミーの対立に対して与えたカントの解決――これは言うまでもなく認識の立場に立つものである――が、反定立の主

張をほとんどそのまま認めていることも、われわれの考えを保証するものであるということができよう。

カントのアンティノミーが以上のようなものであるとき、同じように証明されうるような主張間の対立という意味でのアンティノミー（Vgl. A420f. =B448f.）は成立しえないことにならざるをえない。定立の形而上学的主張と反定立の認識の立場とは、同等な形では対立しえないのであり、カント自身、認識の立場に立つかぎり、反定立はすでに定立に優越しているからである。しかしわれわれは、カントが人間認識の帯びざるをえないアンティノミー性を、その本質的な点において洞察しているのをのちに見るであろう。

二

以上、われわれは、カントが合理的宇宙論の世界表象としてどのようなものを考えていたかをみてきた。それではその表象を批判するさいに前提されなければならないカント自身の世界表象とはいかなるものであろうか。カントの立場は、前述のように、人間認識の立場である。カントは「純粋理性批判」ではこの立場を離れることはない。かかる認識の場に立つかぎり、世界を全体として意味づけ限定することは、重大な関心事ではありえても、断念されるべき性質のものである。かくして世界とはカントにとって、それが何であり、いかに存在するかという観点から問題にされるべき対象ではなく、その世界についてわれわれが何を知りえ、またいかにして知りうるかという人間認識の面からする問いかけの対象となるのである。全体としての世界は人間の認識の場に移されてはじめて意味をもつものとなるのである。

ところで人間認識は悟性にもとづく。この悟性は、「純粋理性批判」の規定するところによれば、何ら知的な能力

を有しない比量的悟性でしかない（A718f.＝B746f.）。もし知的能力を有する直観的悟性であれば、全体としての世界を一挙に把握することができよう。しかし人間的悟性は、ある制約された現象から別の制約された現象へ、換言すれば感性的多様を継時的に彷徨する悟性でしかない。認識はかかる比量的悟性の継時的総合において成り立つのである。このような認識の場において全体としての世界が考えられるとすれば、換言すれば、合理的宇宙論の世界表象を認識の場に移しかえるとすれば、どのようなものが世界と考えられるであろうか。それは、認識の観点においても世界は一箇の全体にほかならないのであるから、悟性のたどるべきすべての現象を加え合せたものと考えられる。かくして世界とはカントによってまず「一切の現象の総括」（A334＝B391）と規定されるのである。この現象は、感性あるいは現象の形式である空間・時間および悟性の形式であるカテゴリーを介することによって構成されるもの、すなわち経験の対象にほかならない。それゆえまた「一切の可能的経験の対象が世界と呼ばれる」（A605＝B633）のである。この規定は悟性の継時的総合の面からみれば「諸現象の総合の総体」（A418＝B446）を意味することは言うまでもない。そしてカントは世界を認識の継時的総合という点で考察するのであるから、この総合の総体としての世界の規定がもっとも基本的なものとなるのである。

このような総体としての世界、または一切の可能的経験の対象としての世界も、それが全体としての世界に関するものであるかぎり、唯一性あるいは統一性を保持しなければならない。この統一性は、すでにみたように、カントがニュートン的空間・時間――それは感性形式としての空間・時間でもある――を唯一のものと考えたところに認められた。しかしカントにおいてはそれに加えて、世界を法則的連関において統一づける悟性の機能も考えられている。感性的多様を「一つの」法則的自然に統一づけ構成する悟性も世界を統一するのである（Vgl. A533＝B561）。この

ことに応じてカントは、世界を空間的時間的な世界と悟性的法則的な世界に分ける。そして前者を空間・時間における現象の量的規定にかかわる数学的全体であるとし、さらに狭義の「世界」と呼び、その同じ世界を法則的連関からみて力学的全体としての「自然」と名づけるのである（A418f.＝B446f.）。しかし「世界」においても「自然」においても、認識の立場に立つかぎり、総合の総体が問題であることに変りはない。

この、継時的総合から考えられた全体、すなわち総体とは、部分の総合の完結という表象である。しかし継時的総合においては完結ということは不可能である。それでは総体とはどこに成立するのか。カントは総体という概念を、説明していう、「この場合には総体という概念は、その部分の総合の完結という表象にほかならない。われわれは、この総体という概念を全体的なものの直観――これはこの場合不可能である――から引き出すことはできないが、しかし部分の総合を継続して無限の完成にいたることによって、すくなくとも理念としてもつことだけはできるのである」（A428＝B456 Anm.）。このように総体とは理性における理念と考えられるのである。かかる理念は「それに対応するいかなる対象も感官には与えられない」（A327＝B383）ゆえに「超越的」である。それは経験を超えている。しかし超えるといっても、世界が現象の理念であることから、その超越は特殊な性質をもたざるをえない。すなわち現象の総合の総体という理念は、経験の内部で、経験において与えられた現象の多様性を超える、換言すれば、経験的総合に絶対的完結を与えるという意味で経験を超えるのである。それゆえこの超越は、経験からまったく踏み出し、現象とは別種の存在領域に達するごとき超越からは区別されるべきものなのである。それゆえ世界の理念についていわれる「超越的」という語に関してカントはつぎのようにいう、「これらの理念（宇宙論的理念）がすべて超越的であることにかんがみて、私はかかる理念を世界概念と名づけるのがもっとも適切と思う。とはいえ超越的とは、

客観すなわち現象を種別的に超越するということではない。これらの理念はただ感性界（可想的存在ではなく）にだけ関係し、それにもかかわらず、総合を一切の可能的経験を超出する程度までおし進めるということである」（A420＝B447）。このように世界の理念の超越は、程度的、過程的な超越であり、経験的総合に結びつきながら進行するものなのである。このような超越的な世界の理念も、先天的で必然的なものである。カントはその根拠を理性統一をめざす理性の機能のうちに求めているが、われわれは、先にみたように、全体としての世界の表象がわれわれにとって根源的であるという点にその根拠を認めることもできよう。いずれにしろカントは先天的で必然的な理念に「先験的（主観的）実在性」（A339＝B397）を帰している。主観的であらざるをえない理由は「総合の完結」という表象そのもののうちに認められよう。決して完結することのない継時的総合を完結したと思いこむのは主観的にのみ可能だからである。

三

以上においてわれわれは、無限な空間・時間における有限な世界というそれ自身矛盾的な世界表象が、カントの認識の場において総合の総体なる表象におき換えられるのをみた。そしてつねに認識の場にとどまるカントは、その総体の表象を超越的でありながら主観的で必然的な理念と考えたのであった。理念と考えられるかぎり、総体なる概念に矛盾は生じない。しかしそれが客観的に考えられる場合には、有限な世界という表象のもつ内的な矛盾をそのまま保持するものでなければならない。むしろ矛盾とは認識の場においてとくに明らかにあらわれるのである。それゆえ逆に、客観的に考えられた総体の概念にこそ、有限な世界という表象の帯びる矛盾がもっとも鮮明な形であらわれ

るということができる。そしてアンティノミーとは、事態的にみれば、かかる内的矛盾を認識の場において際立たせ、対立として定式化したものと考えられるのであるから、ここからわれわれは、総体としての世界こそがアンティノミー的である、またはアンティノミーの原因であるということができるのである。

それでは総体の概念のアンティノミー性はどのように示されるであろうか。それは総体の概念が無限な総合の完結という表象であるゆえに二重の意味で経験的総合に対立するという形で示されよう。すなわちその表象が無限なものから成るゆえに、つねに有限なものにとどまらざるをえない経験的総合に対立し、また完結した、つまり有限であると考えられているゆえに、経験的な無限の――カントに従えば「不定の」――進行に対立するのである。このような概念は、それ自身矛盾的でなければならない。

ところで、世界について考えられる総合の総体の理念は、現象を種別的に超越するものではなく程度的に超えるものであった。したがってその超越は程度的超越であり量的な超越であった。このことは、総合のかかわるべき現象、したがって世界が同種的、量的と考えられていることを意味するであろう。それゆえわれわれは量的に考えられた世界、すなわち数学的世界にアンティノミーが生ずるということができるのである。ただわれわれは力学的自然についてアンティノミーは生じうるのかいなかの考察はここでは断念しなければならない。カントはそこでは同種的総合ではない異種的総合について語っているからである。われわれはつぎに、量的世界が全体として問題になっている第一のアンティノミーに対するカントの考えをみ、そこから総体の概念のアンティノミー性をさらに明らかにしてみたい。

第一のアンティノミーは世界の量（大いさ）についての有限と無限の対立として定式化されている。この対立に対してカントは人間認識の継時的総合の観点から批判する。ところでこの場合の継時的総合は、与えられた被制約者か

らその制約へとさかのぼる背進的総合において考えられている。これは理性が体系的統一を求めるものであり、そのためには制約の系列が上方に向って完結していることが要求されるというカントの考えに対応する。ところでこの背進的総合は完結することはありえない。この背進の不完結性は、世界（現象の制約の系列の絶対的総体）がそのものとして与えられているのではないことを意味する。なぜなら系列が、したがって背進が完結してはじめて絶対的総体たる世界が成立すると考えられるからである。それゆえこの場合には、世界について、それが有限であるとも無限であるともいえない。有限である無限であるという対立は仮象の対立である。かくしてカントは両主張を誤りとして否定するのである。しかしながら問題は、カントのこのような解決が何を意味しているのかということである。それは「経験的背進においては、一つの絶対的限界についての、したがって経験的に端的に無制約的であるような制約としての一つの制約についてのいかなる経験も見いだされない」（A514＝B545）ということでなければならない。われわれは継時的総合によるかぎり、世界全体の経験をもつことはできないし、無限の総合の完結という表象も現実的なものとして考えることはできないのである。ところでカントの解決がこのことを明らかにするにあるかぎり、全体としての世界、したがってまた総体の概念が帯びるアンティノミー性は、カントの解決においても、依然として存しつづけるのである。われわれはこのことをカント自身の解決のうちにみてみよう。

カントによれば現象の世界は継時的総合において与えられる（A501＝B529）。現象の世界はこの継時的総合をはなれてはありえない。世界の量（大いさ）は経験的背進の量によって形づくられるのである（Vgl. A519＝B547）。しかもこの世界の量を限定する経験的背進は、不定的に進行するのである（A521＝B549）。この「不定的」ということについてはさらにつぎのようにいわれている、「私はこの背進をたえず先きへ先きへと続けてゆくことができる。な

ぜならかかる系列においてはどの項も端的に無制約的なものとして経験的に与えられているのではなく、つねにそれよりも高次の項が可能であり、またかかる項をたずねることが必然的とされるからである」(A514=B542)。以上のカントの言葉の中でいわれている世界の量という概念を、われわれは経験的被制約的な項の集合あるいは総体の概念で言い換えることができる。そうすれば、かかる総体は経験的背進の量に応じて増大することになる。ところでこの背進は、その進行において考えられる量の継時的な覚知という面からみれば総合といえるのであるから、被制約的な総体は継時的総合の進行によって形づくられ増大するということができる。かかる総体は有限的であり、したがって経験的な統一をもつ。しかしながらより高次の項が可能的に存在し、それゆえ総体がみずからの統一を破ってそれに向って進むことは必然的なのである。そしてこのような統一を形づくり、しかもそれを破って進む進行は不定的につづくのである。さらには「系列のさらに高次の完結に進みゆくことは無限に可能」(A512=B542) なのである。かくして、現象的世界の量的形式においても、ある総体とその総体を要素として新たな総体を構成しようとする総体間の争いが生じ、そしてそれは限りなく無限に(可能的にではあるが)つづきうることになる。この総体間の争いとは、世界の概念に生ずるアンティノミーにほかならない。[3] このように、カントの解決においても、したがって認識の立場においても、世界が量的に考えられる場合には、アンティノミーは決して解消されえない。カントが彼の就職論文において総体の概念を「哲学者に対する十字架」("De mundi....." §2)と呼んだ所以である。

ところで、さきに総合の完結としての総体の概念は、継時的総合が完結することはありえないということから、誤まりにもとづくものとして否定された。それにもかかわらずカントの解決においても総体の概念にもとづくアンティノミー性は解消されえない。このアンティノミーの不可解消性は何を意味するのであるか。それは、世界全体に

ついて限定を付することが誤まりであるというのにとどまらず、世界全体についてわれわれは何らの限定をもなしえない、ということでなければならない。けれどもこのような帰結は、カントがいわゆるコペルニクス的転回をおこなったさいにすでに考えられていたことなのである。カントはこの思考法の変革（B XVI）によってすべての客観を主観に従属させた。人間は神のセンソリウムとしての空間・時間をみずからのものとし、神が創造論の地平で「根源的原理」[7]として果たす役割を、人間は現象の世界で果たすことになった。人間悟性は、みずからの自発性にもとづき対象的自然に法則を指定する立法者（A126）となった。人間は一つの自然を構成し、世界の大いさを形づくることができるのである。かくして世界とは人間による世界構築物に還元されるにいたる。しかしながらこのような世界なり自然は全体としての世界でも全体としての自然でもない。悟性の自発性の及ぶところに形成されるいわば部分的な、そして関係の面からみられた世界であり、自然でしかない。全体としての世界はいかにしても把握されえないのである。カントのアンティノミー論は、かかるコペルニクス的転回の帰結をわれわれに再確認させるのである。

注

(1) Delekat, F.; Immanuel Kant, 1963, S. 184f.　(2) ibid., S. 185

(3) Martin, G.; Immanuel Kant, 1960, S. 54f. G・マルチン「カント」（門脇訳）六一頁以下。

(4) Delekat, F.; Immanuel Kant, S. 185, 186

(5) 三宅剛一著「学の形成と自然的世界」、五一六頁以下、五七〇頁以下。

(6) 岩崎武雄著「カント『純粋理性批判』の研究」、一九六五年、四二四頁以下。

(7) Heimsoeth, H.; Astronomisches und Theologisches in Kant Weltverständnis, 1963, S. 12